

北海道開拓の村 冬の生活体験

冬の遊び

《竹スキー》

降り積もった雪は、これといった遊具を持たない子ども達に、絶好の遊び場を提供した。雪が降ると子ども達は手製のソリを持ち出し、雪にまみれてソリ遊びを楽しんだ。そして、昭和に入ると子供用ソリも大量に市販されるようになった。またソリが手元にないときは、笹や木の枝をお尻に敷いて滑った。竹スキーもよく用いられ、先端につま先を引っかけて平地(固い雪道)だけでなく、スキーのように坂も滑った。



《木のスキー》



北海道のスキーは、明治41年(1908)に東北帝国大学農科大学(農科大学、現北大)予科のドイツ語教師として赴任したハンス・コラー教授が母国のスイスからアルパイン式スキーを取り寄せ、学生達が馬糞屋にスキーを作らせて滑ったのが最初であるという。明治45年2月、新潟県高田の陸軍第13師団でスキーを教えていたオーストリア人のレルヒ少佐が旭川の第7師団に転属となり、旭川や札幌で指導した。北海道の本格的なスキーはこれ以降とよい。また、当時は一本杖のアルパイン式スキーであった。

大正5年(1916)、農科大学の遠藤吉三郎教授が、2本杖のルウエー式スキーを紹介して次第に普及し、昭和5年には「宮様大会」も始まった。昭和30年代以降、スキーは著しく普及し、特に札幌オリンピック大会以降はレジャー化が進むと同時に、歩くスキーも脚光を浴びるようになった。

《ソリ》



ソリには、泥土の上で使う土橇(どぞり)、冰雪上で使う雪橇(ゆきぞり)、木材の上を滑らす木馬(きんま)などがあるが、積雪地帯の北海道では雪橇が大部分を占め、冬の交通・運搬具として大切な役割を果たしてきた。昭和30年代までは、どの家庭でもたいてい1台や2台の橇をもっていた。

この雪橇にも様々な種類があるが、北海道では馬や犬に曳(ひ)かせる馬橇(ばぞり)や犬橇(いぬぞり)、人が曳いたり押したりする一般家庭や商店用の荷橇(にぞり)、夏の人力車にかわって冬に用いた人力橇、冬山の木材運搬に用いた手橇(てぞり)、それに子供の遊び用の橇などが多く用いられた。

開拓の村で、使用できる橇は、郵便局や駅舎で使われていた荷橇を複製したものである。

参考資料：○北海道の民具(北海道開拓記念館・監修、大久保一良・画、北海道新聞社)

○わら細工と冬の衣装(2005 北海道開拓の村道庁ロビー展)

○北海道開拓記念館第20回特別展・雪と氷と人間(目録)、第46回特別展・雪と寒さと文化(目録)

冬の生活体験①【製作：北海道歴史文化財団 2016.12】